

新島の残したもの～同志社に関わる歌をめぐって

講演	中川 好幸 [なかがわ・よしゆき]
講師紹介	同志社小学校宗教科教諭 日本キリスト教団京都西田町教会牧師

新島襄が残したものはたくさんありますが、本日は、直接は残していないものの、新島の思いや建学の精神などを改めて見直すために、同志社に関わる曲を4曲紹介していきたいと思えます。

音楽を語る時にいつも言われることが、歌詞か曲どちらが重要かという問題です。結論としては両方なのですが、ただ、詞がいくらよくても曲がだめだと歌われないということは言えると思います。今日もってきたのが、甲本ヒロト全詞集「日曜日よりの使者の詩」です。THE BLUE HEARTS↑THE HIGH-LOWS↓などで知られた彼の詞は、実は結構深いことを言っているのですが、彼のつくる歌が支持を受けたのは、彼のつくる曲が単純な曲でしかも歌いやすいものだった、それゆえに多数に受け入れられたということがあろうと思われるのです。

さて、まず1曲目ですが、これは、なかなか知られていない曲です。ですが、大学の入学式・卒業式では必ず聞く曲となっている「同志社大学歌」です。大学歌は、作詞 北原白秋 作曲 山田耕柝 で、当時のヒットメーカーで、関西学院校歌も同じコンビで作られています。北原白秋も山田耕柝も言わばキリスト教の周辺に常にいた人々でした。北原白秋の詩集の名前には「邪宗門」というキリスト教を表すものもありますし、山田耕柝は父親が牧師という家系でした。この大学歌ですが、今聞くとやはり古いタイプの校歌ですが、詞の中には、^{いつ}の精神、One purposeとあったり、三節すべてに「神」という言葉が使われ、真や自由、そして 樹えよ人をという少し聖書的な表現もあり、それぞれのメッセージにはキリスト教主義学校として必要なものが込められていると言えるでしょう。ただ、先ほどの曲の問題で、今これが歌い継がれるか、そして大学生がこの曲に同志社を感じるかという少し難しいところがあることを感じます。

次に、「庭上の一寒梅」です。これは、同志社内で合唱の経験がある方にはよく知られた曲です。以前、学内で録音されたライナーノートには、作詞：新島襄とあるのですが、この表現はおかしいですね。原詩：新島襄とすべきだと思います。この曲は、新島が残した寒梅を唄った漢詩が使われています。新島が非常に好んだ「寒梅」。それは、厳しい風や雪の寒さにもめげず、笑うごとくに開いている。争って先に咲こうというでもなく、努力をするわけでもないが、それでいてあらゆる花のさきがけになっている、まことに謙遜な姿である。これこそ、彼自身があこがれた姿なのでしょう。そして、その姿こそが、彼が言うところの、良心の全身に溢れた人材に重なるのではないのでしょうか。この詞に曲をつけたのが、大中寅二です。同志社出身で、長らく、日本キリスト教団霊南坂教会のオルガニストとして奉仕し、リードオルガンのための曲を作曲した第一人者ですし、「椰子の実」の作曲者でもあります。創立記念日、創立者永眠の日の新橋会で歌われることも多いのですが、やはりこの曲も、そのメッセージの中には素晴らしいものがあるにせよ、今の学生が歌い継いでいくというのは難しいものではあるように思えます。

三曲目は、Doshisha College Song「カレッジソング」です。この曲についての背景は、元神学部教授の本井康博先生の講演「同志社カレッジソング百年」に詳しく記載されているのですが、曲はドイツの軍歌風の民謡「ラインの守り」であり、「カサブランカ」という映画の中でナチスドイツのメンバーが歌い、それに対してフランス国歌の「ラ・マルセイエーズ」が歌われるという場面が印象的です。しかし、「同志社カレッジソング」はこの時代よりもはるか前に作られたので、ナチスドイツの歌ではないということです。また、イエール大学のBright College Yearsにもこのメロディは使われています。

詞の方ですが、新島襄とは出会うことはなかったのですが、近江八幡に信徒の立場で宣教を志してやってきたWilliam Merrell Voriesが作成しました。ヴォーリスはさまざまな才能を持ち、特に建築家としての評判には未だに揺るぎのないところがある人物です。数々の公共的建物、そして学校、教会の建築にその才能が発揮されています。

この「カレッジソング」ですが、英語は少し古いものであること、そして、児玉実英名誉教授の格調高い日本語訳がありますが、今回は、その訳を少しわかりやすくするために、私訳を行いました。（文末の【参考URLおよび文献】参照）

詩の中で特徴的な言葉を拾い上げると、one purpose一つの目当て、志、すなわち同志社、学校の目的は、学生を精神的にも肉体的にも神のためにそして祖国のために生きよう教育することであると言っています。今その歌詞をみると、国のためにというところは引っかかるものではあるのですが、当時の例えば内村鑑三も私は「二つのJ」（Jesus, Japan）のために生きると宣言していましたし、新島自体もやはり一度国を出て、戻ってくるのができた。そもそも日本という国を何とかよいものにしていきたいという思いがあつてこそその脱国であったわけで、その意味でも祖国のためにという歌詞は新島の思いを表していると言えます。そして、1節の後半の「ぶどうの木」はヨハネによる福音書15章から採られているのですが、世界に散らされても私たちはつながっている、これは、世界中のさまざまな地域に同志社の同窓生がいて、海外においてこの「カレッジソング」を歌う時にその感動はそれぞれに起こされ、one purposeをもつものとして、共有できる経験となることを思われます。

3節は、ヴォーリスの歌詞の特徴的なものとして、戦雲の兆候にある時、人々は武器をもって集まるが、私たちは平和を守り通すことによって、国の名と名声を高めるという平和的な立場に立つのです。

さらに、ヴォーリスが4節全部を歌わない時には、是非1、4節を歌って欲しいと言った4節ですが、oneness of our Earthという一体としての世界、人類への愛と奉仕の精神は、自己愛よりも尊いという、利他の精神を示しています。そして、life divineという神にならった生活をおくることが望まれていて、最後にこの4節のみ、祖国のためではなくて、神のため、同志社のため、そして兄弟愛のためというフレーズで締めくくられることが印象的です。兄弟とは、ヴォーリスが自らの学園につけた（近江兄弟社）、彼が大切にしている言葉です。全体を見てきたときに、同志社人として、私たちが共通点として、大切にしていきたい曲とその精神としてやはりこの「カレッジソング」は省くことができないでしょう。

さて、もう1曲、これはあまり知られていない曲ですが、私の勤務する同志社小学校の校歌についてお話ししておきたいと思えます。いわゆる同志社系列の4中高にはそれぞれの校歌はなくて、「カレッジソング」がその代わりとなっていますが、小学校開校の折に、小学校独自の校歌を小学生が歌えるということで言えば必要であろうということになり、作詞作曲を誰に依頼するのかという相談の後、曲は先ほどの「庭上の一寒梅」の作曲家大甲 實^{おおくさ たかみ}のご子息である大甲 憲^{おおくさ のり}さんに、そして、詞をお母様が同志社女子大学出身ということで、谷川俊太郎さんに依頼されたという経緯があります。この詞ですが、特にいくつか、とても気に入っている箇所があります。それは、「ひとのいたみ かなしみみつめ」という、他者への共感を促しているところ、そして、もう一箇所、最後のところにある「えらいひとになるよりも よいにんげんになりたいな」というところです。私学が次々と小学校を開設していた時に、エリート養成ではないかというような批判がありました。しかし、この歌詞はそのような考え方のアンチテーゼになっています。開校10周年のイベントの折、谷川俊太郎さんが、この歌詞の発想について説明して下さいました。谷川さんが、今まで観た中でベスト3に入るとおっしゃっていた、What's Eating Gilbert Grape「ギルバート・グレイブ」というジョニー・デップが主演、レオナルド・ディカプリオが役者としてデビューとなる素晴らしい映画です。このジョニー・デップが一家の長男で、父親は蒸発し、ディカプリオ扮する弟は知的障害を持っている、母親は父親がいなくなってから過食症で体重のせいで家から出られない、そのようなそれぞれが課題を持っている家族の中で、ジョニー・デップ扮するギルバートは何とか家のみんながうまく生きていけるように奮闘しているのですが、実は自分も多くの課題を抱えています。そして、別の町からやってきたガールフレンドから、「あなたは望みがかなうなら何をしたいの」ときくと、ギルバートは「家族のために、これこれのことをしたい」と一人ひとりについて説明するのですが、そのガールフレンドは、「人のことじゃなくて、じゃああなたは自分にとって何がかなって欲しいの」ときくと、彼は、「I want to be a good person.」「いい人間になりたいんだ。」と答えるのです。実際には自分がいい人間でないということをよくわかっているということなのです。このメッセージこそ、同志社の掲げる「良心教育」を的確に表わっているのではないのでしょうか。

さて、今回は、同志社にかかわる4つの曲から、私たちが共通にもつべき、新島や創立の理念にかかわる考え方を味わっていただければ幸いです。できれば、「カレッジソング」の1、4節はみなさん歌えるようになっていただければと思います。

【参考URLおよび文献】

「Doshisha College Song」

<https://www.doshisha.ac.jp/information/public/song/song2.html>（同志社大学ホームページ2020年8月8日アクセス）

「同志社大学歌」

<https://www.doshisha.ac.jp/information/public/song/song3.html>（同志社大学ホームページ2020年8月8日アクセス）

「庭上の一寒梅」

和田洋一『新島襄』日本キリスト教団出版局1973年

「同志社小学校校歌」

<https://www.doshisha-ele.ed.jp/introduction/intro.html>（同志社小学校ホームページ2020年8月8日アクセス）